

聖地のこどもニュース

オリーブの木

No. 66

2017年 11月



仙台カテドラル 元寺小路教会での演奏後のヤクーブ：ほっと一息！

支援者の皆様、

当法人の聖地でのスタッフを務めるかたわら、聖墳墓教会などでのパイプオルガニストとして活躍するヤクーブ・ガザウィ。国際交流プロジェクトで来日したこの夏、日本で初めてのパレスチナ人によるオルガンコンサートが実現しました。仙台元寺小路教会、吉祥寺教会および西千葉教会で、延べ400人近くの皆さまに鑑賞していただくことができ、また聖地の子どものため心温まるご支援をいただきました。とりわけこのコンサートの開催にご尽力下さったすべての方々に心から感謝いたします。

ヤクーブも2005年に15歳で初来日して以来、日本の皆様のご支援に何とかご恩返しを、と望んでいたのも、とても喜んでいました。ヤクーブには、聖地では数少ないパイプオルガニストとして、そして平和の働き手として、これからも大いに活躍してもらいたいものです。

聖地の子どもたちに豊かな教育を届ける活動に皆様の温かいご理解とご支援を、引き続きお願いいたします。

理事長 井上 弘子



認定NPO法人

聖地のこどもを支える会



当NPOは、国際協力NGOセンター（JANIC）によるアカウンタビリティ・セルフチェックを受け、基準の4分野（組織運営・事業実施・会計・情報公開）について適正に運営されていると審査されました。

事務局 〒164-0003 東京都中野区東中野 5-8-7-502 Email ispalejpn@gmail.com TEL/FAX 03-6908-6571

ご支援は… 郵便振替 00180-4-88173 加入者名 「NPO法人 聖地のこどもを支える会」

当法人へのご寄付は、税制優遇が受けられます。

<http://seichi-no-kodomo.org>

生活の中心にオリーブ

匿名希望（国際交流プロジェクト参加者・エルサレム在住）

当NPO法人の平和プロジェクトに参加、また運営にも携わった日本人女性によるレポート。彼女は現在エルサレムの国際機関で働いています。

10月中旬から11月初頭にかけて、パレスチナではオリーブの収穫が行われる。1年間かけてじっくり育ったオリーブの実を摘み取ることは、パレスチナ人にとって豊かな大地の恵みを体感する喜びの時でもある。近代化が進む今日であっても、歴史的に農業人口の多いパレスチナではほぼ各家庭にオリーブ畑があり、家族総出で収穫を行う。手慣れた人はかなりのスピードで収穫していくが、実は一本の木の収穫だけでも想像以上の時間がかかる。それを長くても2週間程度の短期間で摘み取り切らなければならない、1週間ほど仕事の休みを取って従事する人も少なくない。

パレスチナ自治政府の統計局によれば、2016年にパレスチナ（ヨルダン川西岸地区、ガザ、東エルサレム）でオリーブオイル生産を目的に抽出されたオリーブの実の総量は8万4000トン余りにのぼり、これらから2万トンのオリーブオイルが産出された。正確なデータはないがその過半数は一般家庭で収穫されたものと思われる。農産物の種類がそれほど多くないこの地では、オリーブの収穫が生活や経済に大きな影響を持っている。オリーブは一般的に1年毎に収穫の多い年と少ない年が来るそうだが、2017年は少なめの年にあたる。加えて近年は気候変動の影響も受け、前年の降雨量が少なかったり夏場に猛暑が続いたりすると育ちが悪くなる。こうした異常気象にも苛まれ、今年は大分少なめのようだ。

10月頃から冬にかけて雨季がやってくるが、シーズン初めての雨を「オリーブの雨」と呼ぶことがある。収穫直前のオリーブについていた埃などがきれいに洗い



▲収穫されたオリーブ

流され、水分も程よく含んでオリーブの質がぐっと上がるため、まさに恵みの雨である。

パレスチナでは地域毎に共有のオイル抽出工場があり、その住民がそれぞれ収穫したオリーブを持ち込んでオリーブオイルにする。搾りたてのオリーブオイルは随分濁った色をして濃厚、まるでスパイスのような香りが漂う。オリーブオイルの他にももちろん自家製のオリーブ漬けも各家庭で作られる。家庭によってレシピは様々。生のオリーブは苦味が強く（その苦さが好きで生で食べる人もいるそうだ）、一般的に目にするものはすでに少なくとも数ヶ月つけてある。しかし実は漬けて1週間程度のものもなかなかの美味で、苦味が残る一方多少の熟成が進んでおりなんとクセになる。残念ながらこれはスーパーでは手に入らないので、この時期にパレスチナ人の家庭に行ってお馳走になるしかない。

この収穫前後の時期には、ムサッカン（Musakhan）という伝統料理がよく食べられるのだという。これは平たいパンの上に鶏肉、玉ねぎ、スパイスなどをのせてオーブンで焼いたパレスチナ版ピザのようなものであるが、オリーブオイルを多く使うため前年から残ったオイルを消費する目的で食される。身近に手に入るものを寄せ集めたようなこの料理は、まさにパレスチナを感じさせる料理だ。

ベツレヘム周辺では樹齢3000年とも言い伝えられているオリーブの木があり、巨大な幹から伸びる枝先に元気な実をつけている。様々な開拓者や「占領者」、信仰者たちの長い歴史を見守ってきたオリーブの木は、今も人々の生活の中心であり支柱であり続けている。

★ 当NPO法人では2009年、イスラエルとパレスチナで行われた「青少年国際交流プロジェクト」で対話の記念として、エルサレム・ノートルダムセンターの庭にオリーブの苗木を植えた。およそ8年が過ぎてその木は4メートル近くに成長し緑の葉を茂らせている。この秋始めてみずみずしい実がたわわに実っているのが確認できた。（8ページに写真）

私は何とも言えない喜びと希望を感じ、この木が、イスラエルとパレスチナの人々を結ぶシンボルとしてますます大きくなり、たくさんの“おいしい”実をつけるように願った。

聖地にひろがる美しいオリーブ畑が、紛争の犠牲のシンボルではなく、相互和解と共存の有効な手立てのひとつとなることを願っている。（井上弘子）

パレスチナ地区から書き続けるイスラエル人記者

村上 宏一（当法人理事・元朝日新聞中東アフリカ総局長）

イスラエルとパレスチナの和解を目指すオスロ合意が調印された1993年以降、パレスチナ側のガザ、ヨルダン川西岸に住んで現地からの報道を続けているイスラエル人記者がいます。中道左派と目される新聞「ハアレツ」の記者・アミラ・ハスさん（61歳）＝写真＝です。

そのハスさんを、パレスチナ問題にかかわり続けて32年というフリージャーナリストの土井敏邦さんらが招き、9月17日に東大のキャンパスで「パレスチナ占領50年をアミラ・ハスと考える」会を開きました。この会の報告を通してハスさんが伝えていること、考えていることを紹介します。



「考える会」は映画『ヘブロン』の上映から始まりました。土井さんが監督・製作したドキュメンタリーで、西岸南部の最大都市ヘブロンのパレスチナ人市民の生活が、ユダヤ人入植者の存在により圧迫されている様子を描いています。ヘブロンはパレスチナ自治政府の管轄下にある、人口約20万人の完全な自治区なはずですが、隣接するユダヤ人入植地の800人ほどの入植者のために市域の約20%がイスラエル側の管理下に置かれ

ています。旧市街の目抜き通りは入植者の通行は自由なのに、パレスチナ人は車で走れないなど、占領下にあるのと変わらない状態で、入植者がパレスチナ人の家や道路に石やゴミを投げるなどは日常茶飯事です。

「不自由」を取材する「自由」を自覚

上映を受けてハスさんは「（西岸の）あらゆる村に物語がある」と切り出しました。居住地と農地が分断された農家や、検問により移動が制限され門は日に2回しか開かない地域のこと、村人が入植者を殺害したら報復に村が封鎖され、集団懲罰を受けることなどを見続けてきた、というわけ

です。「和平について書くつもりだったのが、占領を書き続けている」と述べるハスさんは、イスラエル人である自分が、特権を持っている側にいること、パレスチナ人の「不自由」を取材する「自由」を自分が持っていることを、苦さをもって常に自覚していると語ります。そして、イスラエル人である以上、自分も占領というシステムに協力していることになるが、この協力をできるだけ少なくしたい、そのために占領の残虐さを記録し1人でも多くの人に知ってもらいたい、と語るのです。

その成果については「情報を伝えれば理解してもらえると思っていた。しかし今は、そんな幻想は抱いていない。イスラエル人の反応にはがっかりしている」そうです。ただ、「ハアレツ紙には英語版があり、世界中に訴えかけることができる。占領の事実の報道を積み重ねていくことが大切だと考える」と話していました。

ハスさんは1956年にエルサレムで生まれ、79年にヘブライ大学を卒業後、労働問題に関する社会活動を経て89年にハアレツ紙に就職。93年のオスロ合意のすぐ後からガザ地区に住んで取材活動を始め、97年からは西岸に移って書き続けています。

現地からパレスチナ人が伝えることとの違いに

認定NPO法人聖地のこどもを支える会の 会員になりませんか？

さまざまなプロジェクトをはじめ、教育支援事業など、当会の活動を総合的に支えていただく会員制度。あなたのご意見が、平和のつくり手を育てます。事務局までお気軽にお申し出ください。

正会員	個人	年額 12,000円／1口
	学生	年額 6,000円／1口
サポート会員		年額 6,000円／1口

正会員は、当法人の総会等での議決権を行使することができます。

ついて聞かれると、「パレスチナ人の情報は世界、特に西側では重要とされなかった。例えばイスラエルによる拷問を伝えてもウソだと言われ、イスラエル人が報じると真実ととらえられる。パレスチナ人が大袈裟に伝えることが過去にあったのは事実にはせよ、差別がある」と答える一方、「パレスチナ人にとっても、正確に伝えることの重要性が認識されたともいえます」と述べました。

占領は利益をもたらしている

イスラエル側が拒否反応を示す「占領」という言葉を、ハスさんは断定的に使います。そして「自分の国イスラエルの建国がパレスチナ人に災厄をもたらしている。90年代以降、イスラエル国内で働いていたパレスチナ人は職を失い、入植地近くの農地は分断され、家族は殺されるか逮捕されるかして引き離され、家が壊された」として「占領の悪」を指摘します。

しかし、イスラエル社会では宗教ナショナリストたちが、西岸は「神に約束された土地」と言い、不信心な人たちでさえ旧約聖書がその証拠であるかのように言うといいます。そして、オスロ合意によりイスラエル軍はいなくなってパレスチナ自治政府が管理できていると思っている、というのです。西岸で自治政府が管理できているのは40%にすぎないのに。ハスさんによると、オスロ合意以前はイスラエル人の側が占領者としての自覚・義務を感じており、人間的接触もあったのが、合意後は分離され、パレスチナ人が接するのは入植者と兵士という普通人でない敵だけになったといいます。また、イスラエル人は全般に占領から利益を得ているから反対の声は小さいと。特に軍・諜報機関の入植地とのかかわりは兵士のキャリア形成に役立つそうです。イスラエルの重要産業である武器・安全保障関連企業とのつながりやエキスパートとしての評価が役立つ、というわけです。こうした「利」が、近視眼的には占領を「良し」とさせるということです。

イスラエル人の無知が問題

休憩中のハスさんに「聖地のこどもを支える会」を紹介し、イスラエル・パレスチナの若者を日本で共同生活させて交流を図っていると説明して考えを聞いてみました。まず返ってきたのは「怒りが強すぎるから難しいことだろう」という反応でした。そして「一番の問題は、イスラエル人が占領の実態を知らないこと」と言いました。パレスチナ人に移動の自由がないことも知らないし、壁の反対側がどうなっているか知らないですむ状況を指しています。「パレスチナ人も同じ人間であることを認識し、相手がどんな境遇にあるのかを知ること、少しでも理解が進めば」と、わずかに希望的なことを述べていました。交流に期待するとしたら、イスラエル側の変化を促すことが、より重要だと言いたいようでした。

聴衆から、報道を続けている動機をたずねられたハスさんは「自分を含めイスラエル人全員が特権により利益を得ているが、パレスチナ側の実態を書き続けることが占領への協力を少しでも小さくするから」と答えていました。そして、イスラエル人が自分の記事を読んでもくれることへの期待はどんどん小さくなるけれど、例えば兵役を拒否した人の中に、自分の記事に触発されたという人がいたことには励まされたと言っていました。

圧力はないかという問いには「イスラエル人社会からの『パレスチナのことを悪く書かない』という非難が圧力の一つ。私は書いているのに」とハスさんは答えました。「パレスチナ自治政府は占領の下請けになっている」と書くこともあるとか。武装抵抗を笑う記事も嫌われるそうで、パレスチナ側からさえ歓迎されるわけでもない中で、書き続けているのです。



分離壁を越えた繋がり

高田 結生 (2017スタディ・ツアー、国際交流プロジェクト参加者)

今年の3月に聖地のこどもを支える会のスタディ・ツアーに参加し、実際にイスラエル・パレスチナを訪問することで私のこの二国に対する考えや感情は大きく変化しました。当事国の人から実際に話を聞き、紛争の現状を肌で感じることで、私は段々とイスラエル・パレスチナを第三者の視点からではなく、主観的に捉えるようになりました。スタディ・ツアーと8月のプロジェクト参加中に聞いた紛争を逞しく生きる青年らの姿は、私の理性や感情に訴えかける出来事であり、この体験が二度目のイスラエル・パレスチナ渡航へのきっかけになりました。

9月の渡航を決めた理由はもう一つあります。友人の一人が私の前回のスタディツアーでの体験を機に紛争について興味を持ち始め、この国を訪れたいと切望したからです。この時私はイスラエル・パレスチナについてより多くの人に知って欲しいという、私のスタディツアー後の思いが他者に伝わったことを嬉しく思ったのと同時に、自分が伝える側であることを改めて実感しました。彼女に紛争を肌で感じて現状を知ってほしい、そして私は伝えることにある種の使命感を感じ、彼女と二度目の渡航を決意しました。

イスラエルからの政治的、経済的抑圧、特に分離壁があることでパレスチナ人が置かれている理不尽な現状は、半年前となんら変わりはありませんでした。しかし、前回より多くの人と交流することにより新しい発見もありました。今回ご縁があり3月の渡航で出会ったパレスチナ人ホストファミリーの結婚式に参加することができました。500人近くが集まる盛大な式に圧倒されると同時

に、パレスチナ各地やヨルダンなど外国に住む遠い親戚や友人もこの結婚式のためにやってきたという話を聞いて、分離壁など物理的障害や紛争という困難があっても切れることはないパレスチナ人同士の繋がりを実感しました。

また今回の渡航中、ヘブロンで生まれエルサレムで育った、テルアビブに住むイスラエル人女性と知り合う機会がありました。私がパレスチナへ行った話をすると、幼い頃彼女は近隣のパレスチナ人と交流がある環境で育ったこともあり、壁の向こう側で生きるもう会うこともできないであろう彼らの現状に深く興味をもっていました。そして私はパレスチナで見たありのままの現状を伝えましたが、それに対する彼女の思いは、言葉では簡単に言い表せないようでした。

2度の渡航とプロジェクトを通して出会ったイスラエル・パレスチナ人が、互いの繋がりを持ち続けることは簡単ではありません。しかし、これまでの活動を通してそれを可能にするのがこの団体であり、私の使命であると強く再認識しました。イスラエル・パレスチナ人同士の繋がり、また彼らと私たち日本人の繋がりとは分離壁では断ち切れません。これからも彼らとの繋がり続けるために、伝えるということ大切に活動していきたいです。



2007年に17歳でプロジェクトのため来日したユセフとその家族。高田結生と友人と共に。



結婚式を挙げたばかりのファディと日本人女子学生（ファディはユセフの弟。2013年のプロジェクトで大槌町のボランティアに参加した。）

誰もこの少年たちを守れない！

井上 弘子

紛争が長引けば長引くほど、もっとも影響を受けて苦しむのは、常に弱い立場にあって傷つきやすい子どもたちや青少年たちだ。イスラエルとパレスチナでも、当事国双方にいろいろな意味での犠牲者が出ている。軍事攻撃や自爆攻撃などで理不尽に命を落とす者、誘拐され、あるいは拘束されて恐怖と不安で心傷つく者、愛する家族を突然奪われて深い悲しみにくれる者など、数え切れない。こういう目に遭った子どもたちや若者たちはどれほど怖い思いをし、心に深い傷を負っているだろうか？ 彼らの心には、憎しみや敵がい心しか生まれないのではないかな？

こんな過酷な体験をした若者にこそ、「平和の架け橋」プロジェクトに参加して欲しい。彼らが生活を共にすることによって、同じ「人間」として分かり合えること、受け入れ合えること、赦し合えることを体感して欲しい。そうすればこのような若者たちこそ次世代の平和構築の希望になるからだ。

今回は、突然拘束されるパレスチナ少年の話をしたい。1967年から50年にわたる占領政策が続く中で、今までも10代の若者が突然逮捕されて長期間拘置所に入れられ、両親はその場所も知らされず、面会に行くこともできないということ



New report: Unprotected - The Detention of Palestinian Teenagers in East Jerusalem

24 Oct 2017

がしばしばあったと聞く。しかし最近ナイフ襲撃事件が相次ぐ東エルサレムでは、こういうケースが増えているようだ。

つい最近、B' Tselem*というイスラエルの人権団体のヤエル・スタイン氏からパレスチナ少年の不当拘束に関して、ぜひ皆様とシェアしてほしいというメールを受け取った。以下簡単にその主旨をお伝えしたい。

* B' Tselem (ブツェレム) とは、創世記にある言葉で「人は皆、神の似姿につくられている」という意味。この団体は、イスラエル人、パレスチナ人双方の人権を守るために活動している。

想像してみてください、あなたがぐっすり眠っ

2018「平和を願う対話の旅」スタディ・ツアーのお知らせ

イスラエル、パレスチナを訪ねて、聖地と世界の平和を考えるツアー「平和を願う対話の旅」、2018年も実施します！

支援者・里親の皆さま、支援して下さっている子どもたちに会いにいらしゃいませんか？「聖地の子どもたちの今」を見てやってください。



【プログラム】 エルサレム、ベツレヘム、テルアビブで、現地の子どもたち、青年と交流。学校や各種施設を訪問。難民キャンプ、分離の壁、検問所の見学、死海観光など。学生は各地でホームステイも体験します。

日 時：2018年2月22日(木)～3月4日(日)

【11日間】(予定)

参加費：約350,000円(おとな)

約310,000円(学生)

お申込み期限：2016年12月末日

お問合せは当法人事務局へ TEL 03-6908-6571 または 090-6538-3255
E-mail ispalejpn@gmail.com

ている真夜中に突然ドアを激しく叩く音がします。びっくりして開けて見ると、そこには覆面をした警官が立っていて、「お前の息子をすぐ出せ!」と言われます。「明日早く警察へ連れて行きますから」と言っても聞きいれてもらえません。15歳の息子が眠い目をこすりながら起きてくると、「すぐ着替えろ!」と命令し、手錠をかけ、目隠しをして連行していきます。

あなたの息子はジープで西エルサレムの警察署に連行されていき、延々とそのまま待たされます。目隠し手錠のまま、いつまでもと分からずに。やっと取調室に呼ばれると、取調官の前に座らされ、両親や弁護人の立会いのないまま、たった独りで過酷な尋問を受け、身に覚えのない罪状を矢継ぎ早に述べ立てられます。ののしられ、平手打ちを食わされることもまれではありません。そして何の反論もできずに、むりやり自白供述書に署名をさせられます。しかもそれは、あなたの息子が良く理解できないヘブライ語で書かれているのです。

取り調べが終われば、拘置所に送られ、タオルと歯ブラシくらいは与えられるはずですが、もらえないこともあります。もちろん着替えはありません。彼はこれからどうなるのか何も教えられていません。何週間も経ってからやっと裁判所へ。しかし裁判官は彼には言葉もかけず、すぐに再収監手続きをしてまた拘置所に送り返します。こうして裁判所と拘置所の間を行ったり来たり。この間あなたは裁判所で息子の姿を遠くから一目見るのがやっとです。結局彼は起訴されるか、あるいは

無罪放免か、条件付き放免かになります。

これは決して想像のシナリオではなく被告人弁護団がこの事実を明らかにしているのです。(注1)

毎年何百人ものパレスチナ少年がたった独りでこの試練を耐えなければならず、両親は訴訟手続きにはまったく関与できません。私たちは、特に悪質な警官や法規を無視する取調官について話しているではありません。東エルサレムの少年の逮捕や拘留に関してはこれが日常茶飯事、警察や刑務所、裁判所を含むイスラエル側の政策なのです。

この事態は生半可な改善策では対処できません。これはイスラエルのパレスチナに対する抑圧的な統治体制のコアな部分なので、何の手がかりもないからです。特に拘置中の未成年者に対するこのような扱いは、パレスチナ人住民を何とか追い出したい東エルサレムでは、長年にわたる差別政策の一面でしかありません。だから、すべてエルサレムに住む人に同じ人間として平等の権利が与えられるように、エルサレム政策が根本的に変わらない限り事態の解決方法はないのです。(注2)

この事実を多くの人々に知らせてください。

ヤエル・スタイン
(ブツェレム・リサーチディレクター)

注1) いろいろなケースについては、B' Tselemのホームページを! (「B' Tselem」で検索)

注2) 東エルサレムは、国際法上はイスラエルによって併合されている地域。そこに住むパレスチナ人はエルサレム「市民」ではなく単なる「住民」であって平等の権利を享受していない。

(情報提供: イスラエルの人権団体「B'Tselem」)

支援金の自動払込みサービス

ご好評を頂いている自動払込みサービス。まだの方はぜひご利用ください。

- * 毎回 郵便局へ払込みに行く手間が省けます。
- * いつからでも、いくらからでも 簡単に始められます!

お申込み・お問合せは

当法人事務局 **03-6908-6571**

または **042-636-9218** (中山)

顔の見える支援 里親募集中!

ある特定の子どもの教育を、毎月一定の支援金で継続的にサポートする里親制度。一歩進んだ国際協力のかたちです。

里親と里子の間で、写真や手紙の交換をすれば(任意)、個人的なつながりが持て、子どもの成長を身近に見守ることができます。

詳しくは、当法人事務局まで。



◀西千葉教会で演奏するヤクブ・ガザウィ



エフェタから届いた
メッセージ

▲ベツレヘム：エフェタ（聴覚障害児の学校）から届いた元気な子どもたちの写真とグリーティングカード。
「ほんとうに生きるとは、心で話し、たましいで耳を傾けること。ボンジョルノ！（こんにちは!）」

実をつけました！



▲エルサレム：アルコッズ大学の卒業式直後の女子大生 独特の衣装を着て誇らしげ！



▲エルサレム：2009年に植えたオリーブ
の木と植樹記念プレート



▲楽器の練習をするベツレヘム難民キャンプの子どもたち